

「従軍慰安婦」映画を通して考える



班忠義監督からのコメント——

この頃、日本と中国、韓国は領土問題で大いに対立し、騒ぎが止まらない。領土問題の論争に端を発し、韓国と中国における旧日本軍による慰安婦問題、性暴力被害などの歴史問題が浮き彫りとなり、謝罪と個人賠償が求められている。私は20年前にこの戦時中の性暴力問題は日中韓という東アジアの平和と連帯の実現に大きな障害になると思い、17年間、韓国を含め、中国各地を走り、また日本にいる旧軍人取材し、映画作りに励んできた。「ガイサンシーとその姉妹たち」は中国に生きる「慰安婦」と言われる女性たちの実態と現状を映し出しており、この作品が当時の歴史的背景の理解と、今日の隣国との関係に役立つことを心から

12月8日(土)

『ガイサンシーとその姉妹たち』

2007年/監督:班忠義/80分/ビデオ

母は真夜中に悪夢をみる、
その夢彼女が若い頃にあったこと

10:00~ 上映

11:25~ 翰光監督×鈴木邦男(一水会名誉顧問)によるシンポジウム
(12:30終了予定)

山西省一の美人を意味する「蓋山西(ガイサンシー)」と呼ばれた侯冬娥。その呼び名は彼女の容姿のことだけでなく、同じ境遇に置かれた幼い“姉妹たち”を、自らの身を挺してまで守ろうとした、彼女の優しい心根に対してつけられたものであり、その後の彼女の人生の悲惨を想ってのものだった。「蓋山西(ガイサンシー)」という名は、やがて山西省の人びとの間で、人間の尊厳を表す言葉となる。この映画は、班忠義監督が9年の歳月をかけ、中国の大地に侯冬娥と、運命を同じくした女性たちの姿を追い続けたドキュメンタリーである。幼くして人生の全てを奪われた女性たちの、現在の記録であり、同時に、私たちの明日に向けて語られる物語である。

監督プロフィール: 1958年中国・遼寧省撫順市出身。1987年留学生として来日。中国残留婦人問題に取り組み、92年「曾おぼさんの海」(朝日新聞社)を出版、第7回ノンフィクション朝日ジャーナル大賞を受賞する。95年「中国人元 “慰安婦”を支援する会」を発足。98年「雲南の子供たちの教育を支援する会」発足。99年ドキュメンタリー映画「チョンおぼさんのクニ」(シグロ製作)を初監督。06年9月「ガイサンシー-蓋山西とその姉妹たち」(梨の木舎)出版。昨年、最新作となる「亡命」(シグロ製作)が全国公開された。

12月9日(日)

『戦場の女たち』

1989年/監督:関口典子/55分/16mm

“大東亜戦争”で生活の喜びを略奪された
パプア・ニューギニア— 女たちの記録

10:00~ 上映

11:00~ 関口監督×ゲスト(調整中)によるシンポジウム
(12:30終了予定)

パプア・ニューギニア—“大東亜戦争”でもっとも悲惨な戦場となった島。第2次世界大戦、太平洋戦争と一般に呼ばれている戦争は、アジア・太平洋の人びとにとっては“大東亜戦争”である。関口監督は戦後45年たった当時のパプア・ニューギニアに長期間のフィールドワークを重ね、(現地の女性たち)へのインタビューを丹念に拾い集める。日本兵との間に子供が生まれたが、誰にも話せなかった女性。神聖な場所である畑から容赦なく作物を奪う日本軍の行為。軍靴で踏みじられるのは人と畑ばかりではない。町には南太平洋最大の従軍慰安所が設置され、村人は協力者に仕立てられた。その一方で、今でも日本軍が村を救ってくれたと信じる「田中さん」は、日本の軍歌を意気揚々と歌う。戦争の無常さを象徴する場面だ。本作は“大東亜戦争”で、生活と生きる喜びを奪われたパプア・ニューギニア戦線の女たちの記録である。

監督プロフィール: 日本で大学卒業後、オーストラリアで天職である映画監督となり、1989年「戦場の女たち」で監督デビュー。過去3作品すべてが、国内外の映画祭で高い評価を得てきた。アンリ監督にコメディのセンスを絶賛され、コメディを意識した作品を目指すようになる。作風は、ズバリ「重喜劇」である。最新作に現在、大ヒット中の「毎日アルツハイマー」があり、認知症予防財団の広報誌「新時代」新コラム「母を撮る」を連載中のほか、シネマテーク動画教室主任講師、津田塾大学非常勤講師も務めている。



関口祐加(本名:典子)監督からのコメント——

「戦場の女たち」は、私が、20代後半から7年かかって作った監督デビュー作品です。20代後半だった私は、ニューギニア戦線のことも従軍慰安婦のことも知らず、そんな自分をとても恥ずかしいと思ったことが、この映画を作る大きなモチベーションになりました。あれから23年、公の立場にいる人間たちの、故意的にもとれるような歴史的誤認発言に大きな危機感を抱いています。この映画に登場する人々は、それぞれ立場は違いますが、全員亡くなっています。映画の中の証言は、今や遺言でもあります。語りにくい加害の歴史こそ、語り継いでいかなければならない。今だからこそ「戦場の女たち」を通して、従軍慰安婦のことをオープンに話していかなければならないと強く思います。23年の歳月を経ても映画は、風化せず、残っていくものだとつくづく思いました。このタイムリーな企画に感謝します。

■料金(当日のみ)

一般:¥1,500 シニア:¥1,200 学生:¥1,000 リピーター割引:¥1,000

■会場 オーディトリウム渋谷

渋谷Bunkamura前交差点を左折 東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS2階
TEL:03-6809-0538 <http://a-shibuya.jp/>

■問い合わせ先 シグロ 東京都中野区中野5-23-16-210

TEL:03-5343-3101 FAX:03-5343-3102 e-mail: siglo@cene.co.jp

